

## 2012 年度後期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 古川 良治

2012 年度後期学生授業評価アンケートの対象科目数は 263 科目であり、そのうち 223 科目から回答を得られた。昨年同時期の調査結果と比較をすると、回答科目が 10 科目ほど増加した。これにより社会イノベーション学部で開講される 85%の科目が、今期の授業評価アンケートによってカバーされるようになった。調査対象科目の全履修者数は、10,070 名（前年同比：+508 名）で、その内アンケート回答者数は、5,351 名（前年同比：+291 名）であった。

今回の調査でスコアの上昇が顕著な質問項目は、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」であり、過去最高値となっている。各科目担当者による授業参加への積極的な取り組みが、学生にも十分に理解され、なおかつ評価にも反映されたことが窺える。アクティブ・ラーニングを推進するためにも引き続きこの取り組みを強化し、双方向性を高めた授業展開を期待したいところである。

設問毎に集計結果を見ることにする。[設問 1] の「出席率」に関しては、平均値は 4.42 であり、「90%以上」と回答した者は 2,885 名と、全体の 6 割を占めている。また、「89~80%」と回答した者は 1,269 名であり、全体の 26%を占めている。昨年同様に良好な修学状況が保たれている。

[設問 2] の授業への意欲については、意欲的に取り組んだとする者は 1,851 名で、全体の 36%を占めている。分布全体では高スコアの側にマークした回答者は 7 割を超えており、これも昨年同様の状況にある。

[設問 3] の授業時間の有効活用については、最も高く評価する者は 2,398 名で、全体の 47%と最多である。これも昨年同様の状況にある。

休講の多さ等を尋ねる [設問 4] では、「そう思わない」と回答した者は 2,841 名で全体の 56%となっている。分布全体を眺めても、休講・遅刻は非常に少ないと評価されている。

[設問 5] の教員の話し方については、「はっきりと明瞭である」と回答した者は 2,277 名で、全体の 45%であった。あまり明瞭ではないとした者は、142 名、全体の 3%と変化が見られない。

次に [設問 6] の授業レベルの適切性であるが、適切であると回答をした者は 1,631 名で全体の 32%であった。高スコアの側にマークした者は 3,550 名で、全体の 69%と増加傾向にあり、授業レベルの適切性については、一定の改善成果が認められる。

[設問 7] の教室内環境については、高い評価をした受講者は、4,072 名、全体構成比では初めて 80%に達した。今後も同様に教室内環境の向上に努めて貰いたい。

[設問 8] の授業に対する教員の熱意については、高い評価をした者は 4,163 名、全体では 81%であった。昨年の調査に引き続き 8 割の受講者が、教員の熱意をしっかり受け止めており、高いレベルで教員が授業にコミットしている様子が窺える。

[設問 9] の教員による授業参加への促進については、最も高く評価をしている者は 2,002 名、全体では 39%であった。高スコアの側にマークした者は 3,317 名、全体で見ても 65%と増加しており、今回の調査で大きな改善が見られた項目の 1 つとなっている。

[設問 10] のシラバス内容と授業内容との整合性については、最も高い評価をした者は 2,272 名であり、全体では 44%であった。高スコアの側にマークした者は 4,009 名で、全体の 78%であった。

[設問 11] の授業への関心と学力増進について、高い評価をした者は 3,942 名、全体の 77%と、ほぼ昨年同様の値であった。

[設問 12] の総合評価については、最も高い評価をした者は 2,398 名、全体の 47%と、僅かな改善が見られた。

また、[設問 13] の板書・スライド内容の読みやすさについて、最も高い評価をしている者は 1,803 名で、全体の 41%であり、全体で見ても 7 割の学生が、板書やスライドを読みやすいとしている。

[設問 14] の予習・復習については、よく行っている者は 806 名、全体の 19%であった。高スコアの側にマークした者は 1,828 名で、全体の 42%であった。予習・復習に努める者は学部全体として増加傾向にあり、大変好ましいことである。しかし、他方において予習・復習をしない者が依然として 3 割弱存在している。予習・復習は授業理解のために必須である。予習復習をしていない者達にも、今後の努力に期待したいところである。

次に [設問 12] の総合評価との相関分析の結果であるが、[設問 11] の授業への関心と学力増進が相関係数 0.78、[設問 8] の授業に対する教員の熱意が、相関係数 0.68 であった。これらを含め他の設問との相関係数についても、ほぼ例年通りの傾向であった。

このように、授業評価アンケートの集計結果は、次第にある一定の値に収束し始めている感がある。既存のカリキュラムについての授業評価アンケートによる定量的な現状把握は確認という意味で重要であるが、教育効果を含めて今後の教育改革をより効果的なものにするには、抜本的な検討もそろそろ視野に入れるべきであろう。